

第80号  
平成20年12月17日

高二 中山 裕介  
高二 田村 史樹

# 読書三昧

甲南中学・高校  
図書館  
図書委員会  
芦屋市山手町  
31番3号

## 灘甲戦での交流会報告

交流会に参加して

中学2年 小野真弘

僕は図書委員です。今年の灘甲戦、僕は交流会に参加しました。交流会というのはある本についてみんなで語るのです、今年は『鉄道員』についてでした。去年も図書委員をやっていたのですが、去年は参加しませんでした。でも今年は何だか参加したくなったのです。灘甲戦の1週間前、僕は『鉄道員』を読み始めました。毎日読んでいるうちに灘甲戦の日がやってきました。当日僕は朝10時に図書館に行きました。すると、中には灘の人がいました。机

机

の上にはお菓子を用意して下さっていて、僕は「気が利くなあ」と思いました。少ししてから、早々と語り合いが始まったのですが、『鉄道員』は、乙松おとまつと、東北が舞台になっていきます。ある時、乙松がずつと働いていた駅が廃駅になることが決まります。そして乙松が最後の列車を駅から送り出した後、乙松は死んでしまいました。乙松は生涯を仕事にささげたのです。

に、話の本筋が分かってきて面白かったです。僕も言いたいことがあれば意見を言いました。灘の人で、『鉄道員』を読んできてない人がいました。しかし、甲南生には、『鉄道員』を読んで来てない人がいなかったのです。またとても熱心な人がいました。みんなの中で一番意見を言っていました。

語り合っていると、時間はあっという間にたちました。最後にみんな写真撮影しました。終わった時、すこしなごりおしかったです。最後にみんなと色々しゃべりました。それも楽しかったです。交流会が終わってかと思いましたが、いろんな人がいて面白かったです。また灘の人とも仲良く出来てよかったです。本はただ読むのではなく、深く考えたりという楽しみに気づきました。僕はよく本を読みませんが、楽しみに

私は、灘との交流会において、「鉄道員(ぼつぼや)」について、灘の図書委員と、意見を述べ、議論しました。その内容やその議論に基づいて、私が出した結論についてここでは簡潔に述べます。

四十も歳の離れた中年の主人公に深く同情している私がいち、全体に平易な文章で綴られ、小説特有の退屈な説明を省いた簡潔な描写は物語の入口から好感が持てた。またストーリー展開のテンポも良く、読者を物語の世界へぐいぐいと引き込んでいく小説家ならではの技が随所に光っている。とりわけ、分かり切ったあり得るはずのない現実を実際に存在する現実のものであると表

今回は6月14日の灘甲戦に行われた交流会の様子を小野君と大西君が書いてくれました。今回交流会で取り上げられた本は『鉄道員(ボッポヤ)』です。『鉄道員』の紹介は2ページに記入しています。2人の感想文を見て興味を持った人はぜひ図書館で読んでみてください。



私は、交流会の始まる一週間ほど前から、『鉄道員』を読み始めた。読み始めるとたちまち物語に吸い込まれて、「うんっん、そこそ...」と無意識のうちに相槌を打ち

私が、灘との交流会の主人公に深く同情している私がいち、全体に平易な文章で綴られ、小説特有の退屈な説明を省いた簡潔な描写は物語の入口から好感が持てた。またストーリー展開のテンポも良く、読者を物語の世界へぐいぐいと引き込んでいく小説家ならではの技が随所に光っている。とりわけ、分かり切ったあり得るはずのない現実を実際に存在する現実のものであると表

私が、灘との交流会の始まる一週間ほど前から、『鉄道員』を読み始めた。読み始めるとたちまち物語に吸い込まれて、「うんっん、そこそ...」と無意識のうちに相槌を打ち

私が、灘との交流会の始まる一週間ほど前から、『鉄道員』を読み始めた。読み始めるとたちまち物語に吸い込まれて、「うんっん、そこそ...」と無意識のうちに相槌を打ち

### 目次

- 1 灘中・高との交流会の報告
- 2 英語科 吉田和史先生 「言葉と他者」
- 3 本の紹介：箱川君・前原君
- 4 編集後記

鉄道員を読んで  
灘交流会を通して  
高校2年 大西 潤



現していくところは実に丁寧で絶妙である。死んだはずの自分の娘が主人公の前に現れ、主人公と交流するなどという展開を、江戸時代といつ時代設定ならいざ知らず、この二十世紀の真面目な小説の主軸にするのはどうしても無理があるように思えた。しかし私は、灘との交流会での議論からこの小説が読者を惹きつけるテクニクは二つあるという結論を導き出した。

その一つは読者の主人公に対する同情と期待である。娘に出会うシーンに至るまでに、主人公の今の現状や生い立ちが描写されている。今まで、自分の私情を殺して、一日も休まずに仕事一筋で生きてきた事、結婚し一人娘を儲けたが、生まれてすぐに死んでしまい、その上、妻も他界したことなどである。読者は、家族を失った主人公に深く同情し、その生き様に惚れる。そんな折、主人公が働いている駅で、彼に親しげに話しかける一人の若い

い女性と出会う。この時点で読者はこの若い娘が、主人公の娘であって欲しいという密かな願いをもつのである。あるいは、孤獨な主人公にせめて優しいひと時をプレゼントしてあげてもいいじゃないかと、読者もまた主人公と一緒に暖かな団欒を小説の中で体験したいのである。そして是非そいつを展開して欲しいと読者自身が望むのである。このように

読者の心情に働きかける仕掛けが事前にはない。だから、この部分については私の意見でもあったが、灘の図書委員の副委員長がより深く審査していた。これについては二つ目のところで、詳しく述べ



をすすめる彼女に少しづつ「もしかしたら」という感情を抱くようになり、何度目かに彼女が駅に訪ねたときに、遠回しに聞いてみると、死んだはずの娘であることがはつきりする。だが、幽霊であることに恐れおののくわけではなく、彼女が自分の娘であった事で、彼女にむしる親しみを感じ

る。この辺りの少しずつ核心に迫っていく主人公の心が、丁寧に描かれ、読者の当然抱く素直な疑問や押さえ

切れない感情を主人公が余すことなくそのまままで代弁してくれる。それはまるで読者の気持ちを作手が手に取って読み解いているような絶妙さがある。このように、あり得ない事実であっても、読者が主人公と一体化することによってスムーズにストーリーの中に入

ていけるのである。作者はこの部分の描写に心血を注いでいると感じた。これは、私の意見と言つよりは、灘の図書委員の皆さんの

意見である。だが、この意見には私も同調し、私の結論の中に取り入れさせてもらった。二番目は、死んだはずの娘が何故主人公の前に現れることができたかといふメカニズムといつようなものに全く触れなかったことである。触れなかったといつより、それを読者に忘れさせると言つた方が妥当かも知れない。出合いの瞬間から、

「もしかして娘なの?」とか、娘なのか否か確認するための会話をしない。主人公と読者は「もしかして娘なのか、いやそんなはずはない。良く似た人が心安く話しかけてきただけではないか。」などと彼女の存在を探るようにつれて行くべきか断るべきか常に心が錯綜しているのである。そんな風に頭の中が疑問符に満ちた状態で娘との交流が始まるので、娘がああ世から現れたメカニズムなど聞こうはずもない。また本当の娘であるのか分かってても親子水入らずの団欒の心地良さでそんなこと

はどうでも良くなる。そして、そのうち読者はこの主人公のキャラクター性に魅了されていく。職人気質で完璧な謙虚さを持ち合わせ堂々と生きている。今はなき理想の「男」像をここに描いて懐かしさを強調させている。この小説の印象は実にこの主人公が決定付けていると言つて過言でない。読者は「メカニズムを知りたい」という覚めた欲望を頭の片隅に追いやつて主人公と共に楽しく甘美な時を過ごし、来るべき別れに涙を堪える。こつとして緻密な作者の企みにすつかり読者は騙され、騙されることに何ら拒否反応を起さないのである。

私は、この灘との交流会に参加して「本の内容について大人数で審査する事の面白さ」について楽しみを見出す事が出来た。出来

ればまた、こういった行事に参加したいと思つ。最後に、交流会の快適な空場を用意し、我々が、心地良く議論できるように取り計らってくれた灘の図書委員の皆さんに心より感謝の意を表して、この文を終えたいと思つ。

書名 鉄道員(ぼっぽや)  
 著者名 浅田次郎  
 書誌分類 【ソノあさ】  
 出版者 集英社





「インフィニティ・ゼロ」

高2 箱川 義樹

この小説は主人公リア・ヤマウチ・ノルバークが不思議な少女、レイに出会うことから物語が始まる。時代背景は現代で、のめり込んで読める本です。

主人公は、日本人とアメリカ人のハーフでマジシャンを目指しています。ジャンルはファンタジー+恋愛で読みやすいです。主人公と少女は、唐突に出会い主人公は、どことなく天然で危なっかしい彼女のことが気になり始める、という感じで物語が展開していきます。

物語が進むにつれて少女の秘密などがわかっていき、主人公は戻れないところまで足を踏み入れていきます。

この小説は物語の季節ごとに巻が別れていて、ストーリーの流れるには、冬から始まり春を経て、夏を過ごし、秋に散る、というところです。物語の山場としてはやはり、夏…つまり三巻が一番感動しました。

ヒトの思いの強さや感情などそういったものを考えさせられる物語でした。機会があれば暇つぶし程度に読んでみてください。

書名 インフィニティ・ゼロ  
出版者 メディアワークス  
著者名 有沢まみず  
書誌分類 【Y/あり/1】



「都会のトム&ソーヤ」

中学2年 前原 良彦

この「都会のトム&ソーヤ」は、主人公の内藤内人と竜王創也が、迷の天才ゲームクリエイターの栗井栄太を追っていく本です。この本の主人公、内藤内人は、ほぼ毎日のように塾に行かされていたが、あるとき塾の帰りに竜王創也がいた創也の後ろをこっそり歩いていると、突然、創也の姿がなくなっていた。次の日創也にその事を言うと、創也は一つの力ギを内人にわたした、このかぎは一体なのだろう。そして昨日、創也の姿が見えなくなったあの道に内人は行った。

すると、ビルとビルの間細い道があった、内人はその細い道を通り、一つのドアの前に立つ。そして創也から渡された力ギでそのドアを開けた。そしたらドアの向こうには暗くて何も見えない廃ビルの1階だった。そこから内人は4階にいる創也のもとにトラップをさけながら行くが・・・と言うのはここまで。

書名 都会(まち)のトム&ソーヤ  
出版者 講談社  
著者名 はやみねかおる  
書誌分類 【Y/はや/1】



「編集後記」

今年一回目の読書三昧です。今回は、灘甲戦の時の報告を乗せています。また英語科の吉田先生にも原稿を書いてもらいました。皆で力を合わせて作ったのでぜひ読んでください。

(図書委員一同)